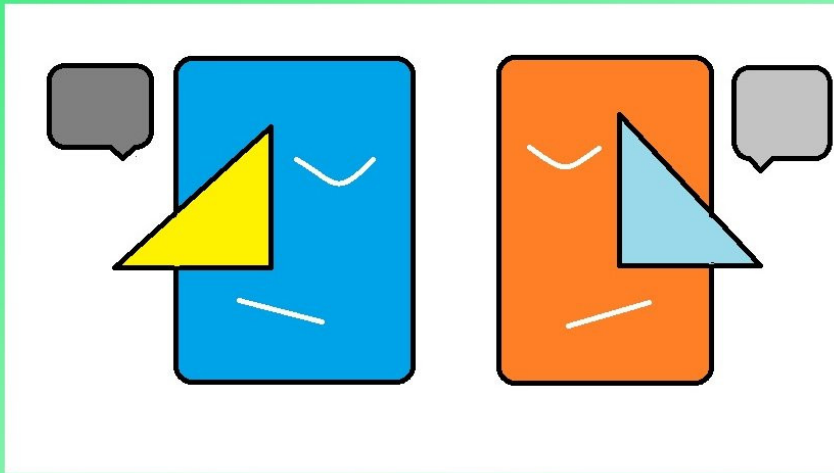


個人主義



みどりのくま

目次

個人主義	1
------------	---

個人主義

チン。

朝の静寂を破り、電子レンジは野菜スープが温まったことを告げる。

私は新聞から顔を上げて、いつものように妻へ声を掛ける。

「おい」

しかし、妻はたっぷりとハチミツを塗ったトーストをもしゃもしゃ咀嚼するばかりである。

おや、と思った。

何か気に障ることでもあったのか。

私は今朝からの記憶を辿る。

心当たりが無い。

今度は少し強く呼び掛けてみる。

「おい」

「父さん、忘れたのか」

背後から息子の声。階段を寝癖をつけたまま降りてくる。

私は無然として「何をだ」と問う。

妻はチラリとこちらを見ただけで、すぐに咀嚼作業へと戻る。

何だこの空気は。

腹立たしくなり大声を出してしまう。

「だから、何をだ」

息子は私の苛立ちなどどうでもいいというふうに着き、マーガリンをトーストにがりがりとなすり付けながら面倒臭そうな声で言った。

「あれは今日からなんだよ」

あれだと。

あれとは何だ。

懸命に思い出そうとするが、わからない。

息子は試すようにしばらくこちらの様子を伺ったあとで、あきれたような顔をして言った。

「個人主義法は、今日から施行されたんだよ」

個人主義法だと。記憶を辿る。

そういえばそんな話があった。内容は思い出せない。

しかし、と思う。それがこのやりとりと何の関係があるのだ。

どういふことだかさっぱりわからないぞ。私は苛々した声で言う。

「それがどうした」

息子は信じられないものを見る目でこちらをじっと見つめている。

私はますます苛々した声で続ける。

「だから、それが、温まったスープを取ってくれと頼んだのに無視すること、一体何の関係があるんだ」

妻は咄しゃく作業をぴたりと止めて、私の顔を凝視する。

おいおい私が何か間違っただけを言ったとでもいうのか。

息子は、哀れみをたたえた微笑を口の端に貼り付けながら、まるで幼な児を諭すような口ぶりで説明を始めたのだ。

「いいですか。個人主義法とは、個人の権利が全てに優先されることを保障するという法律です」

それがどうした。

「つまり、父さんが今まで当たり前のように母さんにレンジから温めたスープを持って来させていたのだけれども、そのことが母さんの意志に反しているのならばこれからは強制することはできません、ということになるのです」

何だと。

妻の顔を見る。

何も答えない。からかっているのか。

私はやりきれない気持ちをこめて言う。

「そんな、昨日まで当たり前にしてきたことを急にどうしたというんだ」

妻は何も答えない。

私は困って言葉を続ける。

「母さん、何か不満があるのならはっきり言えればいいじゃないか」

沈黙を守ってきた妻が突然口を開いた。

「不満とかそういうんじゃない。あなたは何もわかっていないんです」

何だこれは。

どうしたというのだ。

ますます困惑する。

妻は立ち上がり、ぐるりと背を向けて洗い物を始めてしまう。

私はその背中に向かって問いかけるように言う。

「なあ、何がわかっていないのか教えてくれよ母さん」

がちゃ。

妻は洗い物の手を止めて背中で答えた。

「あたしはあなたの母親じゃありません。まるでわかってない」

がちゃがちゃ。洗い物を再開する。

私は戸惑ってしまう。どうすればいいのだ。

成り行きを眺めていた息子が、仕方ないという声で言った。

「だから、個人の意志がなにより大事ということだよ。個人の権利が最優先なんだよ」
何を。

感情が爆発して、息子へ向かってまくしたてる。

「うるさい。さっきから何だその馬鹿にしたような言い方は。それが父親に対する態度か。ふざけるな」

息子は、興奮する私に対してあくまでも冷静に解説した。

「今までは家族のルールに代表されるような、暗黙の了解に皆が従うことが当然のことだと思っていたんだ。不合理なルールだとしても、それが常識だから今までそうしてきたのだからと誰も声を揚げずに我慢していたんだ」

ここまではいいですかと確認するような目を見たあと、息子は続ける。

「しかしそのことが人々の精神を圧迫して健康を害することが最近の研究でわかってきたんだ。体調の劣化は精神の荒廃をもたらす。それは悪循環となり、社会を蝕むまでに影響は拡大した」

息子は人差し指を立てて注目を要求してから続ける。

「これはいけないということで、ではどうすることがいいのか議論が重ねられた。そしてこうした不条理なルールが個人の幸福を追求する権利を知らず知らずのうちに侵害していることを止めさせなければならぬと結論を得た。個人の権利を最優先にしなければならぬと法で定めることになった。法案は賛成多数で可決され、周知期間を経たうえで本日付けで施行された」

息子は一息おいて宣告したのだ。

「母さんは法に基づいて個人の権利を主張しているだけのことなんだ」

馬鹿にしやがって。

私は混乱して喚きたてる。

「何だそれは。お前達はもう家族の情というものを失ったということなのか。家族の絆などもうどうでもいいということなのか」

息子はちょっと思案して、真剣なまなざしで語り掛ける。

「家族の情とか絆とかいうことが変わるわけではないんだ。それより上位に個人の権利があるということだよ。優先順位の問題だよ」

息子は、いとおしいものを見る目をして言った。

「だから、今までもこれかも、父さんは父さんだし、母さんは母さんだよ」

私は、もう言葉が無かった。

今まで何事もなく当たり前のように送ってきた人生そのものを全否定されたようで、どうしていいのかわからなくなった。

個人主義法などと妙なことを議論しているとは思っていたのだ。

しかしその内容を深く考えたことなど無かった。

知らないところで、世間の人々はそんな下らない議論をしていたのか。

馬鹿らしいことだ。全くどうかしている。

馬鹿らしいこと。

いや、そうではないのだ。考え直してみる。

私が無関心だただけで、世の中の人々はそういうことを真剣に思い悩んでいたのだ。

法律になるくらいだから、ほとんどの人々はそうなのだ。

私のような考えは少数派なのだ。

多数派はこれまで当たり前だった日常を苦痛だと考えていたのだ。
いつかひっくり返してやろうとねらっていたのだ。
私は、個人主義法を妙だと思ったときにもっと真剣に危機感を持つべきだったのだ。
そうなのだ。
油断をしているからこんな変な法律が成立してしまったのだ。
これまでの価値観を時代遅れの代物にする勝手な考えなのだ。
これは大変なことになったということだ。
なんとかしなければならぬのだ。
しかし。
今更どうすればいいというのだ。
もう法律は施行されたのだし、皆はそれを受け入れている。
本気で捜せば私と考えを同じにする人はいるかも知れない。
しかし見つかったところで、そうした人々と協力してこの状況を変えることなど私には出来そうにないのである。
そんな面倒なこと、やりたくないのだ。
ならば、もうあきらめるしかないのだ。
たとえこれから世の中が少しずつ変になってゆくとしても、私のほうがそれに合わせて生活してゆくしかないのだ。
私は暗たんたる気分でそう決意した。
気がつけば、息子は朝食を終えて洗面台の方へ行ったらしく、ドライヤーの音があがすす音が聞こえてくる。妻はもう洗い物を済ませてどこかへ行ってしまった。
食卓にひとり取り残されている。
私は力なく立ち上がり、レンジから冷めてしまった野菜スープを取り出して一息でぐいと飲み干した。
カップを眺めながらぼんやり考える。
今日からは自分でこれを洗わなければならないのだろうなあ。
いや待てよ、もしかしたら妻はもう何一つ私の世話などしたくないと言い出すかもしれない。
そうだとすれば、あれもこれも自分でしなければならぬのか。
明日からは少し早起きしなければならないのかなあ。
そうしないと会社に遅れてしまうかもしれないからなあ。
考え直してくれないかなあ。
面倒なことになったものだなあ。

個人主義

著 みどりのくま

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
